

教育長賞の選評

柘原小学校 五年 江口 瑠輝 「すすきゆれ つつうとはしる 赤とんぼ」
印象が鮮やかな句です。すすきが風に揺れたので赤とんぼが飛び立ったとも、赤とんぼが飛び立ったのです。すすきが揺れたともとれますが、いずれにしても、「つつうとはしる」という中七の表現が、赤とんぼの一瞬の飛び方を表して巧みです。細かな観察が、それを表すもつとも適切な言葉を獲得した秀句です。

垂水中央中学校 三年 川原 三奈 「バス停に 先客一人 あかとんぼ」
「バス停」は文学的表現としては、人生のいろいろな離合集散を暗示しますが、そこに「先客」が「一人」だけ居たというのも、かな哀愁を漂わせませます。そのうえでそこに飛ぶあるいは留まる「赤とんぼ」は、秋の静かな情調を強めています。また、「赤とんぼ」が「先客一人」であるという擬人法に解釈しても、俳句が本来もっているおかしみを匂わせて、面白いと思います。

垂水高等学校 二年 森永 ありさ 「帰り道 コスモス占い 賑やかに」
まさしく青春そのものを感じさせる一句です。花びら占いで占うのは、受験か就職かそれとも恋か。何を占うにしても、どういう結果が出ても、賑やかな笑い声とはじけるような笑顔が目浮かびます。青春の真只中の人には実感として共感でき、年配の人には過ぎ去った時間を懐かしく思い浮かべることのできる、明るい好句です。

講評

小学校
俳句は、目や耳に触れた外の世界の動きに、自分が選んだ言葉を与えることで、出来上がりです。五年生北方さんの、うぐいすの声に思わず立ち止ったという句も、外界の刺激に対する反応に敏感に気づいたことに、言葉による表現を与えています。また、五年生永吉さんの、飛ばしたスイカの種の先に桜島があったという情景も、ぼんやりしては気づきません。これらの句は、いつも自分の周りの情景や自分の行為に敏感であるからこそ、優れたものになりました。俳句を作ろうと意識すると、感覚が敏感になるとともに、言葉に対しても興味がわいてきます。

中学校
俳句は言葉による芸術です。一般に芸術の表現は、言葉を使う時に新しい使い方を試みます。それは、見慣れた情景を表現する場合にも、ありふれた誰でも使う言葉を避けたり、今まで誰も使わなかったような言葉を使ったりすることです。たとえば、二先生瀬戸口さんの、つつじを「グラデーション」と表現するような場合です。または、誰も気づかなかった情景を、誰も使わなかった言葉で表現する場面もあります。どちらにせよ、自分の観察した情景に、どういいう新しく適切な表現を与える言葉を探すが、俳句を作る楽しみです。俳句を作ることは、言葉に対する感覚を磨くことにもなります。

高等学校
俳句は、五七五と七七を交互に三十六句連続させる「俳諧」から生まれました。その最初の五七五を「発句」といいますが、そこには季節の挨拶を入れるという決まりがありました。これが独立して「俳句」になったために、文語・定型・季語という決まりが踏襲されていきます。俳句はこのような拘束の中で、自分の観察の精細さとそれに与える言語表現の新奇さから成り立っています。しかし、現在ではこれらの決まりから自由になった俳句もたくさんあります。皆さんの俳句も大部分は自由な句でした。決まりを守るにしろ、守らないにしろ、俳句への関心は、観察力を養い、言葉への感覚を鋭いものにします。観察力と言語感覚を養うためにも、俳句を作ってみてください。